

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03200

研究課題名(和文) ドイツ第2帝政及び日独外交史の新視点 カール・アレクサンダーを中心に

研究課題名(英文) New Perspectives on the Second German Empire and Diplomatic History between Japan and Germany: With a focus on Karl Alexander

研究代表者

星乃 治彦 (Hoshino, Haruhiko)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：00219172

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日独交流に関する資料調査を行い、展示会やシンポジウムを開催した。特にイエナ大学等と協力してヴァイマルで開催した展示会「菊と鷹：カール・アレクサンダーと日本 ヴァイマル・イエナ・東京」はドイツ大使館から三澤公使を迎え、成功を収めた。また、科研と連動するプロジェクトの中心人物のイエナ大学文書館長Joachim Bauer氏を日本に招聘し、資料調査や研究者との交流、出版の打ち合わせを実施した。こうした研究活動で得られた知見は、研究対象のテューリンゲンが東ドイツに属していたことから社会主義論に発展し、他方で第1次大戦中の日本でのドイツ人捕虜問題に展開するなどして、学会や論文での成果発表につながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ史的観点からドイツ第2帝政期における地域外交のポテンシャルを発掘しながら、第2帝政の中央集権的性格に疑問を投げかけ、ドイツの連邦制的伝統を明らかにする。
日独交流史の観点から、ドイツ側ではテューリンゲン州イエナ大学、ヴァイマルの文書館、日本側では、国立公文書館、外交史料館、佐野常民記念館の資料調査をしながら、そこに所蔵されている明治期日本の要人たちの書簡から日独外交の新視点を提示する。

研究成果の概要(英文)：We conducted a survey of Japan-Germany exchange materials. As a result, exhibitions and symposiums were held. Especially, the exhibition "The Chrysanthemum and the Hawk: Karl Alexander and Japan - Weimar Jena Tokyo" held in Weimar 2018 in cooperation with the University of Jena and other organizations was a great success, with Consul Misawa invited from the Japanese Embassy in Germany. In addition, we invited Joachim Bauer, director of the archives of the University of Jena, who was a key figure of the KAKEN-affiliated project, to Japan. The visit was beneficial in terms of his collection of materials, our interaction with relevant researchers and meetings on the planned publication in Germany.

These research activities enabled to present the results in charge of comments at various academic societies, such as the development of socialism in Thuringen belonged to East Germany, and the War Prison Camp for the German in Japan during WW I. Research papers were also actively published.

研究分野：西洋史

キーワード：カール・アレクサンダー 日独関係史 外交史 連邦制 クィア 明治国家 文化史 皇室外交

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19(共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は、言説論の限界を感じ主体を取り戻すという Agency 論に共鳴しながら、本研究は、イギリス・ヴィクトリア女王と同時期に生きたヴァイマル大公カール・アレクサンダー(1818-1901)を系譜学的に位置づけ、近年注目されているエゴ・ドキュメント的手法で、彼の Biografie を考察の縦軸にした。

才能豊かな小邦君主カール・アレクサンダーは、小国ヴァイマルの大公ながら、ヨーロッパ王家に特有な血縁関係を中心とした多国間ネットワークを駆使し、独自の外交を展開していた。当該時期を多元的な交渉史として描くことが出来る。

同時に横軸として設定するのは、以下の2点である。

(1)ドイツ史的観点からドイツ第2帝政期における地域外交のポテンシャルを発掘しながら、第2帝政の中央集権的性格に疑問を投げかけ、ドイツの連邦制的伝統を明らかにする。

(2)日独交流史の観点からカール・アレクサンダーと繋がり深いフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796-1866、以下シーボルト(親))や息子アレクサンダー・フォン・シーボルト(1846-1911、以下シーボルト(子))を媒介として、テューリンゲン州イエナに所蔵されている明治期日本の要人たちの書簡から日独外交の新視点を提示する。とくにそのカギを握る人物と思われるのは、1873年ヴィーン万博で、カール・アレクサンダーに謁見した佐野常民であった。

2. 研究の目的

本研究はザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ大公カール・アレクサンダーのバイオグラフィを考察することで、ドイツ第2帝政期の歴史像を再検討し、日独交流史の新たな視点を提示する。カール・アレクサンダーは、婚姻や他国(日本)とのネットワークを駆使し、地方分権的で連邦制に繋がるような性格を持っていた。こうした点は、ドイツ第2帝政期研究において、ビスマルク外交との併存状況を指摘することが出来、第2帝政像の再考を迫るものである。さらに、申請者は明治天皇をはじめ明治政府の高官やキーパーソンの書簡をドイツで閲覧する機会を得た。これらの史料群からは、日独交流史の新たな側面として、ドイツと日本の多元的ネットワークも明らかに出来よう。

つまり、第2帝政期におけるザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ大公カール・アレクサンダーを考察することで、ドイツの中央集権的性格を再考し、多元的ネットワークとしての日独交流史を明らかにすることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

本研究は以下の3つの柱に沿って展開した。(1)基本文献(カール・アレクサンダー、第2帝政期研究、日独交流史など)の収集、(2)ドイツ及び日本における史料収集、(3)国内外の研究者との交流を展開する。(1)~(3)を総合しながら、適宜成果発表として展示会やシンポジウムを開催し、あわせて刊行物として成果を公表した。

(1) 基本文献(カール・アレクサンダー、第2帝政期研究、日独交流史など)の収集

特に研究を始めるにあたって、基本文献の収集が欠かせない。必要な研究書を揃え、さらに史料収集のため、テューリンゲン州イエナを中心としたドイツに申請者は数回調査し、こうした調査を踏まえ、論文や著作を成果物として発表した。

(2) ドイツ:イエナでの調査と交流

申請者は1982年からドイツ留学を経験し、断続的にイエナとの関係を保持しており、イエナ大学歴史学研究所教授兼同大学文書館長の Joachim Bauer 氏とは長期的に学問的交流を継続している。現在、イエナ大学では、大学史のコンテクストとして日本との関連を調査しており、とくに助言を乞われることも多く、共同研究を積み重ねてきた。イエナ大学は、ヴァイマルを中心に独自に展開した外交公式文書、大公・官吏・政治家間の往復書簡が含まれ、当時日本から留学していた学生・大学院生や彼らを担当していた教授などの大学関係者の史料を擁している。これらの史料群は、明治天皇、井上馨、伊藤博文などの親書などエゴ・ドキュメントを多数保存しているものの、言語的問題から未整理のまま保管されていた。本研究では申請者とイエナ大学の研究者が共同で史料読解にあたった。

(3) 日本での調査

イエナ大学に所在する書簡類から明治期日本の主要人物について、日本の文書館・資料館の予備調査を行った。その結果、シーボルト親子が幕末・明治期の高官などに接近し、他国との橋渡しや外交交渉を担っていたことを確認した。シーボルト(親)はオランダ王国に日本情報を提供していたこともあり、オランダ国王ウィレム2世からその功績を讃えられ、勲章を授与された(ドイツ-日本研究所編『シーボルト父子のみた日本』(1996年))。シーボルト(親)と日本との関連を示す遺品史料は、東京大学図書館内に保管され、一部東洋文庫にも所蔵されている。申請者は、アジア歴史資料センターで公開されている外務省記録にシーボルト(子)の史料についても確認した。シーボルト(子)は外交官として明治政府に情報提供や各国の状況レポートを報告している。こうしたシーボルト親子を介して、日本側がヨーロッパにアクセスした史料は各地に分散している。たとえば、佐賀県の佐野常民記念館は日本赤十字創設者佐野常民の史料を多く所蔵しているが、日本が国際赤十字社委員会加盟申請の際、通訳にあたったシーボルト(子)と同委員会のモア二エの書簡を保存している。これらの確認も行った。

カール・アレクサンダーと明治期の政府要人との関わりについては、国立国会図書館憲政資料室蔵の井上馨関係文書にもシーボルト(子)との書簡が含まれている。シーボルト(子)は外交官として、条約改正交渉に従事している。彼はイギリスとの条約改正を円滑に進めるため、1881年、青木周蔵在ドイツ公使と協働し、カール・アレクサンダーを仲介役として、ドイツ宰相ビスマルクへ接近している(外務省監修『日本外交文書 別冊条約改正関係』(1950年))。イエナ大学の関連史料を精査することで、日本外交の特質が浮かび上がろう。

そのほか、東京大学所蔵の Ost = Asien: Monatsschrift für Handel, Industrie, Politik, Wissenschaft, Kunst etc(『東亜一貿易、産業、政治、科学、芸術などに関する月刊雑誌』1898-1910)も調査した。シーボルト(子)が数多く寄稿し、ドイツにおける日本肯定イメージに一役買っていた。現時点で日本の文書館等でカール・アレクサンダーと幕末・明治期日本を直接的に結びつける史料群は発見できていないが、いずれにせよシーボルト(親子)を介して緩やかな接点を有していたことは明らかとなった。

こうした明治期日本とカール・アレクサンダー周辺の人的交流のプロセスを洗い出すことで、カール・アレクサンダーが当該時期のネットワークを駆使した地域外交の実態と第2帝政期の分権的な権力維持がいかにか可能であったのか、その歴史的背景に迫ることが今後の課題である。

4. 研究成果

まず、日独交流に関する断続的資料調査が、日本(国立公文書館、外交史料館、東京大学、佐野常民記念館など)とドイツ(イエナ大学、日独文化センターなど)を中心に行われた。それに基づく、成果報告として展示会やシンポジウムを開催した。これは同時に、市民向け講座にまで及び、これによって、公開性が担保された。

中でも、イエナ大学等と協力して2018年5月4日~7月1日にかけてヴァイマルで開催された展示会「菊と鷹: カール・アレクサンダーと日本 ヴァイマル・イエナ・東京(Chrysantheme und Falke. Carl Alexander und Japan - Weimar · Jena · Tokyo)」は、大きな成果を収め、ドイツ大使館からも三澤公使を迎えて、大使館を巻き込んだ更なる広がりが保障できたことは評価すべきである。

また、プロジェクトのドイツ側の中心人物であるイエナ大学文書館長 Joachim Bauer 氏を日本に招聘できたことは、本人の日本での資料収集というのみではなく、関係する研究者との交流、ドイツで予定されている出版に関する打ち合わせなど多岐にわたって、有益なものであった。

知見をベースに、成果発表として、対象としたテューリンゲンが東ドイツに属していたところから社会主義論、第1次世界大戦中日本でのドイツ人捕虜問題に展開するなど、各学会等におけるコメントが可能となった。同時に、雑誌などペーパー媒体による研究論文の公表も以下の一覧のように、旺盛に行われた。

また、この科研の研究成果として、Ostasien im Blick-die universitaet Jena und Das Grossherzogtum Sachsen-Weimar-Eisenach 1873-1945, in : Quellen und Beitrage zur Geschichte der Universitaet Jena 17, Franz-Steiner-Verlag Stuttgart 2021年に出版予定の原稿がある。

成果報告書「ドイツ第2帝政および日独外交史の新視点 カール・アレクサンダーを中心に」(研究代表者 星乃治彦福岡大学人文学部 教授)も現在印刷中となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 星乃治彦 / 大久保里香 | 4. 巻 50(4) |
| 2. 論文標題 「ドイツー辺倒」と伊藤博文の独逸憲法調査 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 福岡大学人文論叢 | 6. 最初と最後の頁 929-959 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 今井宏昌 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 書評『ドイツの平和主義と平和運動：ヴァイマル共和国期から1980年代まで』[竹本真希子著] | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 ドイツ研究 | 6. 最初と最後の頁 95-99 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 今井宏昌 | 4. 巻 829 |
| 2. 論文標題 書評 高橋秀寿著『ホロコーストと戦後ドイツ：表象・物語・主体』 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 歴史評論 | 6. 最初と最後の頁 104-108 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 今井宏昌 | 4. 巻 47 |
| 2. 論文標題 はじめに 趣旨説明（特集「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印一〇〇周年の地平から） | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 九州歴史科学 | 6. 最初と最後の頁 107-109 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 今井宏昌 | 4. 巻 47 |
| 2. 論文標題 ドイツ史からみたアイルランド革命(特集「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印一〇〇周年の地平から) | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 九州歴史科学 | 6. 最初と最後の頁 143-149 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 今井宏昌 | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 ドイツ義勇軍経験とナチズム運動 ヴァイマル中期における「独立ナチ党」をめぐって | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 ゲンヒテ | 6. 最初と最後の頁 3-15 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 パトリック・ヴァーグナー著、今井宏昌訳 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 「古参闘士」の最後の戦場 第二次世界大戦最後の数ヶ月におけるナチ活動家の孤立・共同体形成・暴力 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 ヨーロッパ研究 | 6. 最初と最後の頁 33-47 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 今井宏昌 | 4. 巻 155 |
| 2. 論文標題 ヴァイマル共和国初期におけるボード・ウーゼの義勇軍経験 エゴ・ドキュメントにもとづく予備的考察 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 史淵 | 6. 最初と最後の頁 81-102 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計25件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 星乃治彦 |
| 2. 発表標題 コメント |
| 3. 学会等名 第68回日本西洋史学会大会・シンポジウム6「社会主義圏をめぐる歴史研究の行方 ソ連・東欧史・ドイツ史の観点から」(招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 星乃治彦 |
| 2. 発表標題 コメント |
| 3. 学会等名 九州歴史科学研究会10月例会・九州西洋史学会秋季大会(合同)シンポジウム「近代日独関係における文化と外交」 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 星乃治彦 |
| 2. 発表標題 コメント |
| 3. 学会等名 第29回西日本ドイツ現代史学会・合評会「佐藤卓己『ファシスト的公共性 総力戦体制のメディア学』(岩波書店、2018年)をめぐって」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 書評会コメント 高橋秀寿『ホロコーストと戦後ドイツ 表象・物語・主体』(岩波書店、2017年) |
| 3. 学会等名 ドイツ現代史研究会10月例会(招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ドイツ兵俘虜をめぐる文化交流 第一次世界大戦期久留米俘虜収容所を事例に |
| 3. 学会等名 九州歴史科学研究会10月例会・九州西洋史学会秋季大会（合同）シンポジウム「近代日独関係における文化と外交」 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 街頭政治の観点から |
| 3. 学会等名 第29回西日本ドイツ現代史学会・合評会「佐藤卓己『ファシスト的公共性 総力戦体制のメディア学』（岩波書店、2018年）をめぐる」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ドイツ革命期の「武装せる市民」 ハレの住民軍を事例に |
| 3. 学会等名 鍋谷科研第7回研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 久留米俘虜収容所研究の現在 グローカルな歴史実践をめざして |
| 3. 学会等名 公開シンポジウム・九州歴史科学研究会2020年1月例会「地域の中に世界を読む 第一次世界大戦期日本におけるドイツ・オーストリア＝ハンガリー兵俘虜」 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 コメント(セッション パネル・ディスカッション「文理融合教育の課題」) |
| 3. 学会等名 シンポジウム「情報ガバナンスと文理融合教育の課題」(招待講演) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ドイツ史からみたアイルランド革命 |
| 3. 学会等名 九州歴史科学研究会6月例会・シンポジウム「「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印100周年の地平から」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ヴァイマルと向き合う 戦後日本のドイツ研究における「教訓の共和国」 |
| 3. 学会等名 第35回日本ドイツ学会大会シンポジウム「ヴァイマル100年 ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 「転向」をめぐる経験空間 ヴァイマル末期ドイツ共産党の「シェリンガー路線」をめぐる |
| 3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 戦間期ドイツの「赤い伯爵」 アレクサンダー・シュテンボック=フェルモアの「転向」 |
| 3. 学会等名 第3回ドイツ語圏近現代史研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 書評会コメント ローベルト・ゲルヴァルト著 / 小原淳訳『敗北者たち 第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917-1923』みずす書房 |
| 3. 学会等名 ドイツ現代史研究会10月例会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 久留米のドイツ兵俘虜収容所 |
| 3. 学会等名 市民向け公開シンポジウム「なぜ百年前の福岡・久留米にドイツ兵俘虜がいたのか？」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ヴァイマル期ドイツにおけるボード・ウーゼの彷徨 右翼青年からコミュニストへ |
| 3. 学会等名 第116回トーマス・マン研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 戦間期ドイツにおける右翼青年と「革命」 ボード・ウーゼにおける коммуニストへの道 |
| 3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ナチ体制末期における「民族共同体」と「古参闘士」 パトリック・ヴァーグナーの研究をめぐって |
| 3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 第一次世界大戦中の久留米俘虜収容所 |
| 3. 学会等名 久留米大学法学部創設30周年記念シンポジウム「軍都久留米のドイツ人俘虜：百年前の久留米と世界を探る」（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 合評会1 今井宏昌『暴力の経験史 第1次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918-1923』（法律文化社、2016年）でのリブライ |
| 3. 学会等名 ドイツ現代史研究会4月例会（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 「ナチ左派」からコミュニストへ ヴァイマル末期におけるボード・ウーゼの「転向」と農民問題 |
| 3. 学会等名 九州西洋史学会春季大会・九州歴史科学研究会4月例会（合同） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ヴァイマル中期における義勇軍経験とナチズム ハイנטツ・オスカー・ハウエンシュタインをてがかりに |
| 3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ドイツ史からのコメント |
| 3. 学会等名 米騒動・大戦後デモクラシー100周年研究会（第1回） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 戦間期ドイツにおける「ナチ左派」からコミュニストへの「転向」 ボード・ウーゼとシュレースヴィヒ=ホルシュタインの「農民問題」 |
| 3. 学会等名 釧路公立大学地域・産業研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 今井宏昌 |
| 2. 発表標題 ヴァイマル中期における義勇軍経験とナチズム ハイנטツ・オスカー・ハウエンシュタインの叛乱 |
| 3. 学会等名 2017年度広島史学研究会大会（西洋史部会） |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 植上一希 / 伊藤亜希子 / 星乃治彦（他9名） | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 法律文化社 | 5. 総ページ数 200 |
| 3. 書名 日常のなかの「フツー」を問いなおす：現代社会の差別・抑圧 | |

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 山室信一編 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 232 |
| 3. 書名 人文学宣言（今井宏昌「暴力の経験史の構築へ向けて」掲載） | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 アンドレアス・ヴィルシング、ベルトルト・コーラー、ウルリヒ・ヴィルヘルム著、板橋拓己、小野寺拓也、今井宏昌訳 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 慶應義塾大学出版会 | 5. 総ページ数 160 |
| 3. 書名 ナチズムは再来するのか？ 民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------------------|--|--|----|
| 研究 分 担 者 | 今井 宏昌 (Imai Hiromasa) (00790669) | 九州大学・人文科学研究院・講師 (17102) | |